

歩行者の街路空間評価による目抜き通りの環境整備の方向性

正会員 ○渡邊智子*¹ 佐藤誠治*²
小林祐司*³ 姫野由香*⁴
山下博康*¹ 川端威士*¹

中心市街地
フルモール

社会実験
アンケート

休憩空間

1 研究の背景と目的

かつて、中心市街地は商業、文化、情報の中心としてその都市の活気の源であった。しかし、近年の急激なモータリゼーションの進展により、全国的に衰退の傾向を示している。このような中、各地域では中心市街地を活性化させる様々な試みがみられ、大分県大分市においても、中心市街地の目抜き通りである県道大分港線（中央通り）を永続的にモール化し、今後の中心市街地の活性化に繋がるよう試みている。本研究では、現在の中央通り来街者の現状を、街路空間調査やアンケート調査を行うことによって探る。来街者の意識と要素の配置関係を分析することにより、今後のモール化に向けての課題と、中央通りの在り方を検討する際に有益な知見を導出することを目的とする。

2 既往研究における本研究の位置づけ

中心市街地における公共空間の担う役割を検証した研究として、公共空間の日常的・継続的利用を視野に入れ、利用実験を通して今後の賑わい創出を目的とした研究⁽¹⁾や、現状を調査し、過去の交通社会実験の経緯と成果を紹介すると共に、アンケート調査を行い、今後の実験継続への課題を提示している研究⁽²⁾があるが、これらの研究では、得られた結果をその後の事業に如何に繁栄させるべきかという知見の導出には至っていない。本研究は、来街者のアンケート調査と街路空間の調査を行い、今後の対象街路の在り方に有益な知見を導出することを目的とする。

3 アンケート調査の概要

中心市街地の来街者に対し、現在の中央通り利用におけるアンケート調査(インタビュー形式)を行った。調査は、平成19年11月22日(木)に行われた社会実験(調査地点:図1)に合わせて実施し、回答者は162名であった(表1~2)。

表1 調査概要

実施日	平成19年11月21日(水)
調査実施時間(予定時間)	17:00~21:00
実施場所	県道大分港線(中央通り)6車線
交通規制時間	交通規制なし
交通規制範囲	中央通りを中心とした約14ha
調査員数	23
調査ポイント(ヶ所)	5
サンプル数	162

表2 性別と年齢

	性別と年齢	
	男性	女性
20歳未満	21	21
20代	20	32
30代	9	11
40代	7	7
50代	7	16
60代	2	5
70代	0	3
80代以上	0	1
合計	66	96
	162	



図1 社会実験範囲とアンケート調査ポイント

4 来街者による休憩空間の評価

以下では紙面の都合上、対象街路における休憩空間のみの改善策を検討する。

4-1 来街者の普段の休憩空間

表3 休憩したいと思うかどうかと場所の選択の関係

	サンプル数	割合	
		割合	割合
ある	有料休憩所	66	61%
	無料屋内休憩所	9	8%
	無料屋外休憩所	31	28%
	休憩をとりたいがとらない	2	2%
	無回答・無効	1	1%
ない		47	29%
無回答		6	4%
合計		162	100%

中心市街地の来街者の67%が「休憩したい」と感じており、この内「有料休憩所」を利用する割合が61%(全体の41%)であることがわかる(表3)。

4-2 中央通りの休憩空間の評価

来街者の休憩に対する評価をみると(図2)、「休憩したい」と「休憩したくない」空間はほぼ同じ位置にみられ、街区⑤においては「休憩したくない」と指摘される数の方が上回っている。

また、中央通り歩道空間の空間構成要素の把握を行い(地図上にプロットし、街区ごとにカウントする:表4)、これらを図2と比較すると、ベンチの数は街区⑤が最も多い(13)にも関わらず、休憩したくない傾向が表れている。これらから、ベンチ等の休憩要素が多ければ休憩したいと指摘されるとは限らないことがわかる。また、要素の合計(45)等も他と比較して最も多いことから、休憩空間として選択されるには、適切な要素の数があると推察される。

4-3 休憩したい・したくない理由の特徴

図2の評価において、なぜその空間で休憩したい・したくないと思ったかをKJ法により分析すると(図3~4)、共通の評価軸として「街路環境」がみられた。その内

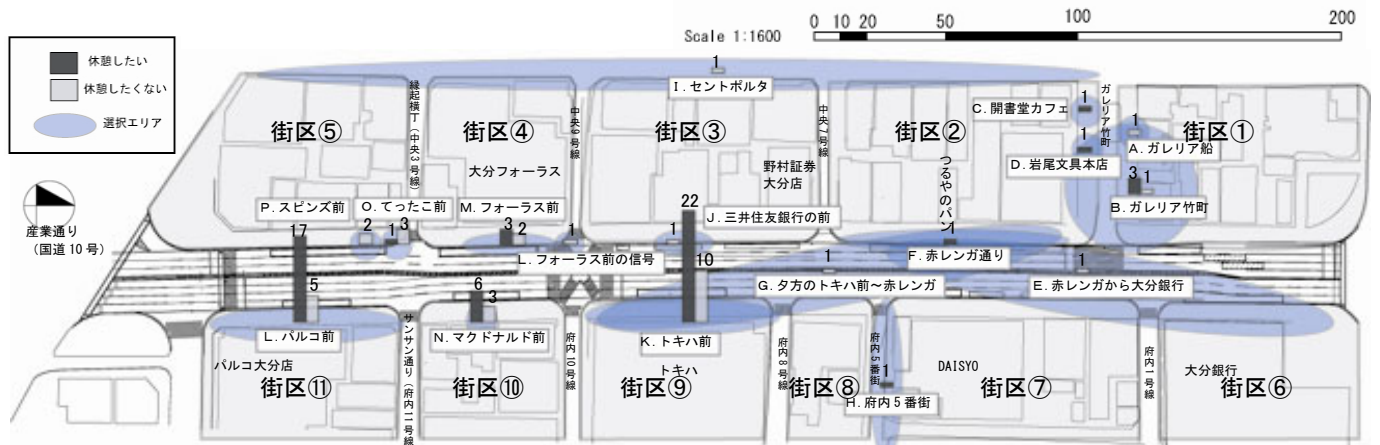


図2 中央通りにおける休憩空間に関する場所の選択

「休憩したい」には、広さ等の「快適性」、イスの適度な量等の「設備」等が挙げられた。また、「休憩したくない」には、狭い等の「街路形態」や、「衛生環境」、設備の不足といった「場所」等が挙げられた。このことから、休憩に関するイス等の設備は必要であるが、その要素数が多すぎるとは、狭さに繋がり、休憩行為の妨げになると考えられる。これは、4-2の結果と一致する。また、「休憩したい」では、「店舗の魅力」や「交流」等から周辺店舗の魅力や他者との関係が、「休憩したくない」では、「雑然・賑やか」、「雰囲気」、「怖さ」等の、人や賑わいによる落ち着きのなさが一つの評価軸になっていると推察できる。これらから、密でない適切な要素数の配置と、他者の存在を感じられる空間づくりが休憩空間には重要であり、周辺店舗との関わりも考慮する必要があるといえる。

5 まとめ

本研究で得られた結果を以下にまとめる。

- ・休憩したい来街者は半数以上だが、その内6割は有料休憩所を利用しており、現在の中心市街地に休憩所が不足していると考えられる。
- ・KJ法により、詳細な空間評価の構造を整理し、整備する上で重要な評価軸を抽出できた。
- ・街路空間調査とアンケート調査から、密でない適切な要素数の配置と、他者の存在を感じることができ空間づくりが、休憩空間には重要であることがわかった。

《参考文献》

- (1) 渡辺直, 加藤浩司, 宮脇勝, 北原理雄「中心市街地の賑わい創出を目的とした公共空間利用実験—千葉市『都市景観市民フォーラム』を事例に—」2001年度第36回 日本都市計画学会学術研究論文集
- (2) 阿部宏史, 栗井睦夫「岡山市都市部における交通社会実験の成果と課題」2001年度第36回 日本都市計画学会学術研究論文集

表4 中央通りにおける歩行空間の構成要素

街区	東						西							
	(1)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	合計	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	合計	
交通機関	バス停	0	1	2	1	0	2	6	2	2	0	2	1	7
	バス降り場	2	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	1	
	タクシー乗り場	0	0	0	0	1	0	1	1	0	2	1	4	
	駐輪場	0	0	0	0	2	0	2	5	2	5	3	13	
機能	違法駐輪	0	2	3	0	2	1	8	0	3	5	2	3	
	街灯	6	3	3	1	5	3	21	4	3	5	4	3	
	信号機	1	1	2	0	2	0	6	1	0	0	1	2	
	スピーカー	1	0	2	0	2	0	5	0	0	0	0	0	
	ごみ箱	0	1	1	0	0	1	3	1	1	0	1	4	
緑	ブランダー	0	0	2	0	0	1	3	1	2	0	3	2	
	樹木	4	5	4	2	6	3	24	7	4	6	2	5	
	植栽	5	3	3	3	7	4	25	7	5	6	7	7	
	ベンチ	5	7	2	1	4	5	24	13	8	4	7	3	
休憩	水飲み場	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	1	0	
	指定喫煙所	1	0	1	0	1	1	4	1	0	1	1	4	
	案内板	1	2	0	0	1	2	6	0	0	0	1	2	
情報	案内板	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	
	電話ボックス	2	1	3	2	1	1	10	1	1	1	0	3	
アート	コミュニティ・像	1	0	0	1	0	0	2	1	0	0	1	3	
合計		29	27	28	12	35	24	155	45	33	35	37	187	

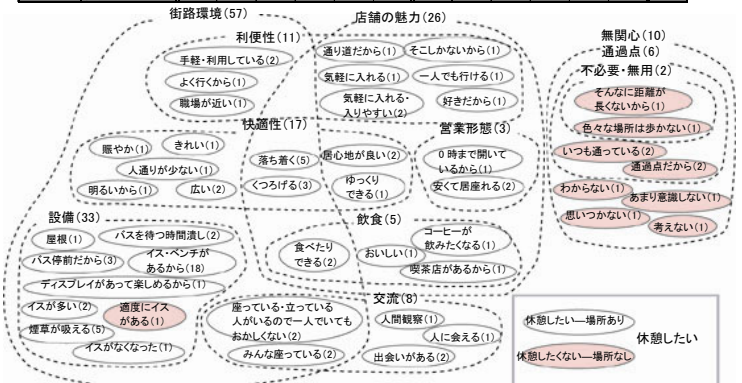


図3 KJ法による「休憩したい」空間の分類

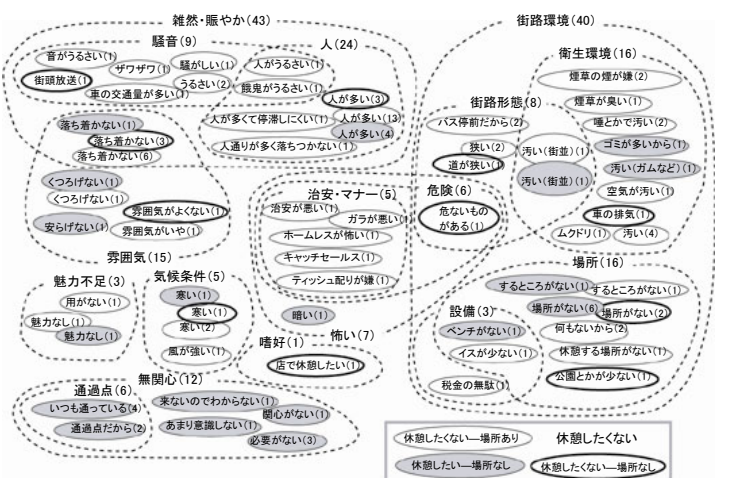


図4 KJ法による「休憩したくない」空間の分類

*1 大分大学大学院工学研究科博士前期課程

*2 大分大学理事・副学長 工博

*3 大分大学工学部福祉環境工学科建築コース 准教授・博士(工学)

*4 大分大学工学部福祉環境工学科建築コース 助教・博士(工学)

*1 Graduate Student, Master's Course, Graduate School of Eng., Univ.

*2 Trustee and Vice -President, Oita Univ., Dr.Eng.

*3 Associate Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Oita Univ., Dr.Eng.

*4 Research Associate, Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Oita Univ., Dr.Eng.